大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

社会福祉調査論の基本的前提：社会科学論と科学方法論

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-03-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 野村, 哲也
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003743

社会福祉調査論の基本的前提

― 社会科学論と科学方法論 ―

野　村　哲　也

1. はじめに

最近、社会福祉学の理論構築とか、福祉の統合化理論とかいったことが、社会福祉研究者の間でクローズアップされて来ている。実践科学としての社会福祉学が、その対処すべき諸現象の復雑化、多様化と共に、それに応え得る理論的支柱を確固たるものにすることを求められている証左と言えよう。

しかしながら、社会福祉そのものが学際的（interdiciplinary）構造を持ち、社会科学をはじめ医学等の自然科学をも含んだ綜合的応用科学であるため、それぞれの基礎学問分野の方法論的相違や使用概念の違いによって統一的な学問体系を作りあげることは甚だ困難であり、「厳密な学としての哲学（フッサール）」的精緻さを求めて行くならば、恐らく福祉―経済学、福祉―社会学など基礎分野に分解されて連字符的福祉学になってしまう恐れがある。

従ってここでは、社会福祉の学問的特質ないしは固有性を実践科学であるということと、インターディシプリナリーな応用科学であると規定し（もちろんこう規定することに議論の余地があることは承知の上で）、概念構成の精緻化などの方法論論議は、実践への有効性との関連において、すなわち実践効果を高めるためのより高度な用具（practical theory）を作るのに必要な限りにおいて深めて行くという視点から考察を進めることにする。

この事は次の例によっても理解出来よう。すなわち、ニュートン力学は物質の究極にせまる超微視的世界や、宇宙空間のような超巨視的世界をカバー出来るような包括的理論体系ではない。しかしビルを建て橋を架けるのに、量子力

学も相対性理論も不要であり、ニュートン力学こそが有効な基礎理論なのである。もちろん量子力学の研究そのものの価値がないというのではない。それは核物理学者にとって不可欠であるが、建築学者が量子力学を云々する必要はないということなのである。社会福祉の領域もまた同様であって、その理論化ということが、上の例で言う建築学者に物質の究極は何かというところから始めるべきだというのに似た方向に深入りすることは余り生産的でない。それどころか、日本の社会福祉の実践科学としての進歩を妨げて来たのは、理論崇拝的な社会哲学的社会科学の風土であったとさえ考えられるのである。

2. 社会福祉の学的構造と社会福祉調査論

(1) 社会福祉学が実践科学であるということは、大きく分けて次の3つの下位研究領域を必須の構成基盤とする。

達成手段の選択
↓
対象（現実）認識 ⟶ 目標（理想）設定

社会福祉の営為とは、その対象が個人の生活障害であれ、集団のもつ社会問題であれ、それに対する実践家（たとえばソーシャルワーカー）の意図的働きかけ（介入）によって変化をもたらそうとするものといえよう。とすれば、働きかける対象ないしは事象の科学的認識は実践の不可欠の前提であり、また、働きかけによって意図的にもたらそうとする変化の結果についての予測ないしは、願望する理想像の設定なしに行動は起せない。コントが社会改造的実践意図のもとに〝予知せんがために知る〟という実証主義的立場から、彼の社会学を社会物理学という名称で出発させた事は周知の通りであるが、その合理的予見に至る前提が、社会事象についての実証的認識であり、社会福祉調査論はその客観性、厳密性に関わる方法論を攻究するものである。また予知とは予測可能性であって、それは社会事象の法則性の認識を前提とし、目標達成手段（技術、用具）の有効性を問うものである。その意味で、効果測定の方法を論ずる社会福祉調査は、達成手段の領域にもまたかかわって来る。ただし、そこで論ぜら

れる方法論は、例えば、貧困一般（poverty）ないしは貧困の論理を問題とし、理念的ないしは思弁的に階級なき社会への歴史的必然を論ずるといったものでなく、国民の生活水準についての可視的（visible）指標を理論的に構築し、貧困階層（the poor）の生活水準の上昇と格差の縮少という available で manageable な目標設定とそれへの有効な達成手段の選択を論ずるのであり、利用可能性と操作可能性が基本的要件となる。

なお、社会福祉方法論ないしは技術論とは、この目標達成のための有効な用具（福祉資源）や技法を体系的統合的に整備し洗練させる実践理論の構築に主たる関心が向けられるが、その際理論の優劣を計る基準は、有効性と予測可能性であり、効果測定の調査は実践理論の検証という意味を持っている。

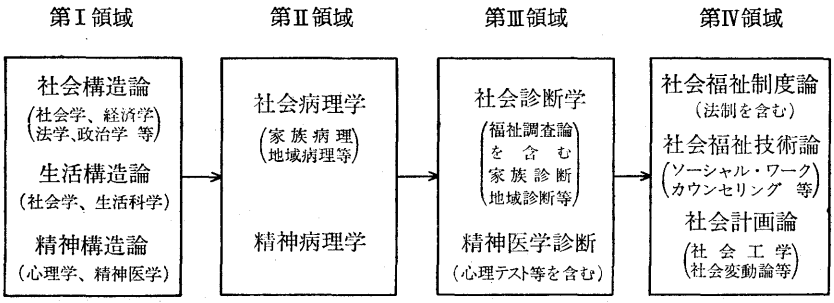
いま1つの下位領域である目標設定については、当然、価値理念が関連し、哲学的、イデオロギー的色彩が強くなると考えられる。しかし、実践科学の立場からすれば、ここでも、あるべき至福の状態（Glücksideal als Sollen）とか、価値とは何ぞやといった思弁的なものが主題となるのではなく（そうした論究が不必要だというのではないが）、例えば見田宗介の「価値とは主体の欲求を満す客体の性能である」[1]といった相対的、操作的な定義を出発点とし、究極価値（ultimate value）と即時価値（immediate value）の区別等の操作的概念構成とその理論が中心課題となるのである。まして価値が普遍的な形で存在するのでなく、文化人類学の知見に示されるごとく、異なった文化を持つ社会では全く逆の様相を示すことすらあることを考えれば、それぞれの社会あるいは時代で、何がよりよき状態（Wohlfahrt）と考えられているのかを見出すこと（これは意識調査の領域である）がむしろ前提条件であろう。あるべき価値ではなく、リントンが定義した様に[2]「1つの社会のメンバーが習得的に分有しかつ伝達して行く文化」のエートスとして、現にその社会に存在している価値体系の科学的認識が問題なのである。

(2) 次に社会福祉の実践的、臨床的課題とそれを支える基礎科学との関係的構造であるが、それは医療の学際的構造と極めて類似しているので対比的に論じてみたい。

医学では、まず基礎としての解剖学や生理学において身体の構造と機能を科

学的に（古代における秘術的なものでなく）認識し、次いで身体機能に障害が生じた場合についての因果関係を明らかにする病理学があり、その両者をもとにして診断学が組立てられる。その際、診断に不可欠なX線検査や生化学的検査はより広範な物理学や生化学等の応用技術から成立っており、それぞれの基礎科学の進歩なくしてはより優れた病状認識は出来ないのである。種々の治療法はこの診断の上に立ってはじめて成立するが、この一連の過程に（clinical practice）おける構造—機能上のキーポイントが診断にあることは明らかであろう。診断を誤った治療は、いかにそたが優れたものであれ無意味だからである。

以上と対比される社会福祉の領域での諸科学の連関構造は、大略次の様になるが、ここでも診断にかかわる第Ⅲ領域と治療に対応する第Ⅳ領域に相対的ウェイトがかかることは論を俟たない所であろう。



（もちろん、医療では対象が身体機能にほぼ限られているし、治癒の標識としては通常の社会生活が営み得る状態というように、可視的かつ具体性をもった事象であることが多いが、福祉では、個人の欲求充足度という複雑で不可視的なものから、マクロには社会のより望ましい状態への変革といった抽象的で理念的なものまでが問題とされており、福祉固有の対象領域すら明確であるとはいい難い。そのため時には、社会計画といった福祉プロパーの研究者には手に余るようなものまで持込まれたりするのであって、福祉研究者はまずその研究領域を社会福祉学の連関構造の中に正しく位置づける所から始めねばならない。）

前頁の表から言えば、社会福祉調査論は、社会診断の診断材料となるデータ（情報）の蒐集技法について、より有効で正確な方法（測定・検査法）を創出する指導理論（Leitungstheorie）の攻究ということになるが、データの蒐集は同時にそのデータの解析と不可分である。むしろデータ解析を前提としていかなるデータを蒐集するかが決定されるといっても過言ではないであろう。従って社会福祉調査論という名称は余り適当でなく、社会診断学の方法論的基礎づけ（Begründung）すなわち診断学方法原論と考えてもよいのであるが、今はそれについて深入りしないことにする。

なお、社会学における社会調査が経験科学としての理論検証の用具という意味をもっているのと同様、社会福祉調査には社会福祉の実践理論構築のため実証という役割もあるが、それはすべての経験科学にとって自明の事であり、むしろ現在の社会福祉の固有の領域（前述の第Ⅲ、第Ⅳ領域）の中で最も遅れている社会診断学の体系化にこそ社会福祉調査論の特殊性があるといえよう。M.リッチモンドがケースワーク論の体系化（ケースワークとは何か：1922）に先立って「社会診断」（1917）をまとめたものも、次元はやや異なるが同様な発想と考えていいだろう。臨床医にとっての初期診断が誤りなく行なえるための診断学の必要性と同様、ケースワーカーにとっても、クライエントの状況を的確に把握することは、その処偶にとって前提となる必要条件だからである。

3. 社会福祉調査論の方法

—古典的社会科学と社会工学的社会科学—

(1) 科学方法論の2つの流れ

「社会」の認識および研究において、それが科学的でなければならぬことは誰しも異論のない所であり、福武の言うごとく「現代は、壮大な社会哲学の空語がもはや通用しない時代であり、まさに実証的な社会科学の時代[3]」なのである。しかし我が国の場合、科学的とは何か、実証性、客観性、論理性をいかにして確保するかという科学哲学的方法論にまで立至って論議されることは少く、一種のスローガンの様に素通りされ、依然として社会哲学に類した観念的

思弁に偏る傾向が見られる。それをもたらしたのは、観念論哲学の影響を受けたドイツ社会科学の方法論であるが、そこでは科学方法論のもつ2つの側面のうちの1つに目が注がれる。[4] すなわち、科学は組織的体系的知識であるべきだという要請に発し、体系化の視点とも言うべき方法論的基礎を論ずるもので、社会科学はいかにして成立つかといったことから始まり、対象の相違にもとずく研究方法の相違、体系構成の方法、概念等を問題とする方法論なのである。しかし、科学方法論にはもう1つの側面がある。それは科学が経験的実在に関する実証的知識であるという要請にもとずくもので、経験的実在を客観的に把握するための手段を精錬する方法にかかわるが、それによって始めて常識というあいまいさを超えた科学的知識が得られるのである。これはプラグマティズムの洗礼を受けたアメリカ社会学の主流をなす方法論であって、そこから社会工学的（自然科学的）社会科学が生まれた。

我が国では未だ前者の影響が強く残り、社会科学方法論というと前者が意味されることが多いが、以下にのべるごとく、両者は共に科学方法論の2側面であり、一方のみに偏ることは誤りであろう。のみならず、前者の方法論から出発した古典的社会科学[5]と呼ばれるものには、その出発点において幾つかの問題点があり、ドイツ的方法論そのものも起源にまでさかのぼって検討を加える必要がある。そうした批判の1つはK.ポパーの「歴史主義の貧困」（1957）において展開されているが、ここでは両者の対立点よりは類似点に着目しつつ対比的に論ずることにする。

古典的社会科学の方法論的典型の1つは、M.ウェーバーの了解的方法であるが、それと社会工学的社会科学の相違点の大きな特徴は、前者が自然現象と社会事象の相違を重視し強調することから社会科学における独自の方法として生まれたのに対し、後者は自然科学との類似点に着目して自然科学と同じ様な方法でもって迫ろうとする所にあるといえよう。しかし、了解的方法の出発点となった自然科学との相違の強調については、その時代背景ならびに自然科学の方法そのものについての理解不足があることを知らねばならない。

周知のようにウェーバーの方法論の根底にはH.リッケルトの「自然科学と文化科学」（1899）の影響があるが、そもそもこのリッケルトの所論には19世

紀の著しい自然科学の進歩と、それを支えて来た自然科学的方法—彼の言う普遍化的法則定立的方法ならびに法則定立に当っての厳密な検証手段としての実験ならびに数理科学の適用—が圧倒的勝利を収める中で、人間精神あるいは人間社会についての学も、形而上学的思弁性を脱却して社会哲学から社会科学ないしは文化科学へ脱皮するには「科学」としての方法論を必要としたという背景がある。この事はリッケルトと時を同じくしてポアンカレの「科学と仮説：1902」、「科学と方法：1908」が自然科学者の側から出され、さらにはまたM.プランクの「物理学と世界観」など自然科学がイデオロギーの領域にまで侵入してくる勢いであった事からもうかがえよう。

こうした中でリッケルトは「文化科学の体系的研究は、出発点として方法の形式的区別を反省せねばならない[6]」として文化科学に共通な興味、問題および方法を限定し得る概念の構成すなわち科学方法論（Wissenschaftslehre[7]）を考えたのである。例えば、認識対象の実在性（Realitäten）の相違—空間を充す実在と充さない実在—および、価値と結合しない自然の過程と価値と結びついた文化客観の違い等をあげて[8]、文化現象の認識や考察の仕方（Kulturwissenschaftliche Betrachtungsweise）には文化的意味や価値による選択が重要な要件になると言う。かくして出発した社会科学方法論論議は、現在もなお、いかなる枠組ないしは視点から現象を考察すべきかといった方法論的理論の優劣を競い合っているがいま1つの重要な側面、すなわち理論の当否は実証によってのみ評価され得るということには殆んど目が向けられていないという欠陥をもっている。しかしこの事は既にポアンカレによって「社会学者は沢山の方法を考え出した。社会学の学位論文が出る度に新しい方法が提出され、しかもそれを書いた新ドクトルは、ひたすらその方法を用いざらんとこれ努める。従って社会学はその有する方法の数は最も多く、その挙げる結果は最も少いという科学である[9]」と皮肉的に批判されいてる通りであって実践科学においてはなおさら古典社会科学的方法論は不毛の論議と言へよう。

(2) 対象選択における類似と差異。従って、むしろ自然科学と社会科学の類似点をあげることによって、社会事象への自然科学的方法の適用ならびに限界を考える事の方が生産的であろう。以下ウェーバーの所論とポアンカレの所

論を比較しつつ見て行くことにする。

ウェーバーが「社会科学方法論」において強調した自然現象と文化社会現象の差異の１つは、後者の歴史的一回生起という個別性であり、その個性記述的因果連関の認識は自然科学の普遍化法則的認識とは異なるものであるという。すなわち「実在（ある文化事象）の極微の截片を記述するだけでも遺漏なきを期し難いし、それを惹起した原因は無数でありその１つ１つを知覚することは不可能で、まさにそれは混沌としか言いようがない。その混沌に秩序をもたらすのは、実在の中の我々にとって（価値理念に照らして）有意義と認められる側面にのみ光を当て、その個性的因果連関の説明を行うという事によってのみ可能であり、それは法則に基づいて実在を分析し、これを一般概念の中に秩序づけることとはまるで異なる種類の見方（方法）[10]」だとする。

しかしこの差異は自然科学と社会科学の差異ではなく、むしろ後にのべるように理論科学と実践ないしは応用科学の差異と言った方がよいであろう。自然現象においても、彼の言うように〝極微の截片〟を遺漏なく記述することは出来ないし〝無限に存在する原因〟といったレベルで言えば、まさに混沌であり、２つとして同じ現象は起らない。自然科学といえども木から落ちる枯葉の一片の運動を余す所なく記述することは出来ないのである。木の葉に働く力は無数の成分からなるし、そもそも葉の形状と質量分布すら千差万別であり、それを確定することは不可能である。ましてその運動を〝普遍化法則の一類例として隷属させる〟（リッケルト）ような認識をしてみても何の意味もないのであって、自然科学もまた有意味性を持った事象のみが研究対象となる。リッケルトやウェーバーの理解した自然科学とは、ライプニッツの予定調和説的思想とニュートン力学との混合になる〝世界は微分方程式であらわされる〟といった陳腐な自然科学的決定論であったように思われるのである。

またウェーバーの〝限りなく豊かな現象の中から限りある部分だけを選び取る〟ことについて、ポアンカレの場合も[11]「科学の方法は観測と実験とに存する。科学者に藉すに、もし無限の時間をもってすれば、彼に向ってただ〝見よ、しかして正しく見よ〟とのみ告げれば足りるであろう。さりながら科学者は一切を見つくす程の時間を持たない。……よってここに選択の必要が生ず

る。それ故、まずいかにして選択をなすべきかが第一の問題となるのであり、これは歴史家のみならず物理学者にも課せられる問題である」ということを冒頭にかかげているのである。

さらにまた、自然科学における法則や理論の構築において最も重要な方法論上の手順である「理想状態（絶対真空や摩擬ゼロ）を想定した思考実験的推論と無視し得るゼロ（negligible zero）による省略（neglect）と近似」は、その構造においてウェーバーの理念型的モデル構成の際の抽象化的思惟整序および、実在の中から一定部分に光を当てて取出すという社会科学的認識の方法と手順において大きく変るものではなく、むしろ類似しているといった方がいい。例えば絶対真空とか摩擦ゼロの状態とかは、ウェーバーが理念型を性格づけたと同様、実在の典型でも平均像でもなく、まさに思惟によって構成された理念像なのである。

また、選択の基準について、社会科学方法論では、一定の価値理念を基準にして選択されるという内容的なものをあげているが、それは余り明確なものではない。ウェーバーの場合、価値理念が主観的であることを争い得ぬこととして認め、かつ我々が世界に対して意味を与える意志と能力をもった文化人であることを文化科学の先験的前提だというのである。[12] そして〝主観的に思念された意味を通しての行為の理解という所に彼の方法の特色があるとされているが、それは科学的とは言い難く未だ社会哲学的思弁の域を出ていない。

これに対しポアンカレでは、[13] 研究対象の選択基準として道徳的なもの（価値）に優位を置くトルストイの言葉等を引用しつつ、それにも又直接的実益（応用）にも基準を置き得ないとして、科学の為の科学という基準を考える。彼の言うこの基準は、E．マッハの思考経済説（物理学的認識の本質）に似たものであるが、理性による思考が人間の文化を生み出したということから出発し、思考の結果の蓄積としての文化は、思考経済という作用を通して行なわれると考える。〝我々の思考の１つ１つは出来得る限り多くの場合に役立つものでなければならない。法則が普遍的であればある程貴重である所以は実にここに存する〟というのである。科学機械は自然科学法則の応用的具象化であるが、これによって我々は労力の節約のみならず、物を作る手順についての思考の節約を

行っているのである。あるいはまた、文化の領域に属する〝諺〟も、我々の社会的行為についての思考経済的機能をもつものである。

なお、このような文脈での科学のための科学という研究者の価値基準は、純粋科学の成立のためには一旦直接的実益といったものから切断（Abschnitt）した思考が必要であるという意味であり、普遍化法則を見出すことと、その実践的（practical）な応用の区別がなされている。その点ウェーバーの個別的事象の理解としての社会科学からはその応用的実践技術は生まれず、実践は全く別の個人的次元での価値実践的信念の問題となり、価値実現のための手段およびその有効性ということが十分視野の中に収められていないように思われるがそれについては後にあらためて触れたい。

(3) 統計的帰納と思惟的洞察。ポアンカレの科学と方法におけるもう1つの重点な指摘は、〝繰返しあらわれる事実への注目〟および〝しばしば繰返される事実の中からの単純化作用〟である。[14] これはA、B 2つの事象が表面的には違っていても本質は同じであるといったふうに事象の〝質〟を問題とし洞察的にそれを見出すのとは全く異なる方法である。それは繰返し起る（ないしは多数の）事象の観察の中から微少なる差異は〝無視し得るゼロ〟と考えて省略する所から生まれる量的な単純化であって、自然科学にはそれによって進歩して来たといっても過言ではない。そしてこの方法は社会科学においても又、社会事象の類似性や傾向性として、その法則的把握には不可欠のものである。例えば、出る杭は打たれるといった諺も、人間の社会的行為の法則性を表現したものであって、個々の人間関係的状況は千差万別の個別的なものであろうが、その中での類似性—それは繰返される事象の中からの単純化によって見出される—を抽出し、経験的帰納的に定式化された命題なのである。慣習、モーレ、フォークウェイズ等、社会学の幾つかの主要な概念も、〝繰返しあらわれる事象の観察〟を抜きにしては生まれなかったであろう。あるいは又、法学における自然法的思考も、かくかくの状況においては人間はこの様に行動することが多いという傾向性をぬきにしては成立ち得ないのである。しかもそれは、ウェーバーの言う〝意味ありと認められる事象のみをとり出してそれに光を当てる〟という方法とは全く異なった原理によって見出し得るものなのである。

もちろんこうした事と、ウェーバー（マルクスなど歴史主義的立場に立つものも含めて）が視野においたものとは大きな違いがある。歴史立義的立場においては、K．ポパーがホーリズムおよび錯雑性として批判した如く、民族、国家、階級といった大きな社会的対象についての長い時間的視野（time-span）における変化、すなわちマクロな現象の全体的関連を考察とするものであり、そこでは繰返し起り得るというような事は余りない。（我々が歴史的データとして信頼出来るような記録は、近々千年か二千年前までであろうし、それも文化の進んだ国に限られる）従って現時点では、マクロな歴史的事象に対しては古典社会科学的歴史的方法が、手段として有効性をもち得るとは言い得るであろう。しかしそれも本質的な違いというよりはデータ量の多少という量的差異にもとずく違いであり、両方法の差は段階的に縮め得る可能性をもっている。事実、一方において、少数のデータについての数理統計的解析法が進歩しつつあるし、他方、ホリゾンタルな広がりを持ったマクロな事象（例えば種々の国際比較）に対するデータはコンピューターの駆使により大量に記録され処理されるようにうになりつつあるからである。かってウェーバーやマルクスなど偉大な天才的頭脳によってのみなし得た数少ないデータ（歴史的社会的事実）からの洞察—因果連関の理解や歴史的必然の認識—も今や次第に大量のデータを駆使した数理解析にとって代られつつあるといっても過言ではないであろう。

特に実践・応用科学としての社会福祉においては、マクロな問題よりもややミクロな、ないしはR．K．マートンの言う中範囲の理論の適用され得る領域が多いことを考えれば、なおさら自然主義的社会工学的接近が有効であるといえよう。

もちろん多くの古典社会科学者の所説が一個のイデオロギーないしは社会思想として持つ意味や価値については異論をはさむものではないし、それ等が個々の行為に対して持つ影響力について否定するものでもない。むしろ社会福祉においては人権思想や市民社会の理念といったものが実践や問題意識のエネルギー源的意味をもつとも考えられるのであって、福祉における社会工学的アプローチないしは領域は、それをいかに有効に達成するかの手段にかかわるものなのである。

(4) 自然科学の精密性と社会科学。以上の様に考えてくると、科学方法論としての自然科学と社会科学の差異は、理論構成ないしは推論の方法の差異ではなく、〝無視出来るゼロ〟という概念を中心とした精密度の差異ということになる。

科学における基本的要請が論理性と実証性であることは囲知の通りであるが、一つの科学が初歩的な段階から精緻なものに進歩して行くには、さらに論証の厳密度と実証ないしは記述の精密度を高めることが要求される。

前者については、科学哲学からの批判、すなわち、科学的命題は理論言語や観察言語により、かつそれらを記号論理学的に構成するという方法によるべきだという主張がある。その主張からすれば、ウェーバーやマルクスを含めて「古典社会科学の大部分は、近代論理学にもとずく科学方法論という立場から見ると科学というには程遠く、むしろ文学の一種である[15]」と評されるのである。また後者については、もともと社会科学になじみの薄い概念として考慮の外にあったが、自然科学ではまさに精密度を一桁高めることがノーベル賞に値する業績となることもあるくらい大きな進歩となるのである。以下自然科学の方法を検討することによって社会科学の精密化の道をさぐってみたい。

ポアンカレの方法論では[16]〝観測における感覚と器材の不備に基づく誤差〟をどうするかがさきにあげた観察対象の〝選択〟と並ぶ基本的課題とされているが、社会科学においてもこの手法、すなわち誤差ならびにそれが無視し得るゼロである時に存在しないものとして単純化する思考法は分析の有力な方法なのである。例えばウェーバーは、実在についての知覚判断（認識）に関して、実在の極微の截片まで漏れなく言いつくし得るなどはとても不可能であり、個性的実在の一部分のみを文化価値に照らして選び出すという操作によってのみそれが可能であるということを社会科学方法論の出発点としているが（それを諸方法の1つとして認めるとしても）、これ又自然科学的方法の誤解に基づくものであって、自然科学においては〝実在の知覚判断において、漏れなく完全に〟行ない得るなど初めから問題にならない幻想と考え、すべては誤差と間接的認識の世界であるという事を前提としている。例えばX線乾板に映し出されるラウエの斑点は、原子排列についてかなりの実験誤差をもった間接的に知覚し得る

像でしかないし、原子排列そのものも非常に単純化したモデル的仮説でしかない。従ってそれらをもとにして理論検証を行い得るのは、誤差の存在と無視し得るゼロによる単純化を前提としているからである。方法論的に言えば、量的側面についての単純化を前提とする論証から出発して質的側面に迫るというアプローチであり、それがあってはじめて、科学の進歩としての厳密化ないしは精密化が達成され得る。文化価値に照らして対象の一面に光を当てるという質的側面を重視するアプローチでは、発想の革命的転換といった非連続的進歩はあり得ても、累積的連続的進歩は起り難い。古典社会科学において数百年前の所説が未だに議の対象となり得るのは、この質的アプローチにおける非累積性、非連続性の故に外ならない。そして、連続的、社会改良的実践である社会福祉の研究においては、それと対照的に、累積的進歩とつながる量的側面重視のアプローチがより有効であることは言うまでもない。社会哲学の築く壮大な空中楼閣は、幻想的目標とはなり得ても、それを築く足場の組み方は教えてくれないのである。

自然科学的方法の特徴は、まず厳密に規定された理想的条件（空気抵抗や摩擦ゼロ）において、大きさ0という仮定の質点に対し、数理科学的厳密性をもった運動方程式が成立するという理想状態での思考実験的仮定から出発するところにある。次いで気体分子運動論の様にやや具象度の高い理論では、完全に滑らかな壁面をもった直方体に、完全弾性球と考えた気体分子が、ある一定の温度に対応して持つエネルギーで運動して壁面との衝突を繰返すが、その時の運動量の変化の統計力学的総和が気体の圧力となってあらわれるというモデル的思考方用が採用され、それによってボイルシャールの法測が説明される。そしてその検証は、温度計や圧力計の目盛を読むという誤差を多く含んだ操作と、現実には滑らかでない壁面の容器やポンプという装置によってなされるのであるが、その際、思考実験的理想状態と実験における現実の状況との差が無視し得るゼロに近いと考えて省略でき、かつ実験に伴う誤差が一定限度内であればその法測は実証されたことになるのである。

あるいは又、無限大的スケールをもつ天文学においても、天体間の距離にくらべて、個々の天体の大きさは無視し得るゼロ（相対的無限小）と考えて点と見

なす単純化が行なわれるのであり、ましてや、その天体を構成する物質分子がどう違うかということは論議の外である。

社会科学においても似た構造の現象は多い。例えば、1つの国家の歴史的消長を問題にする時、国民の個々人の心理や社会的地位の差は無視されるか、国民性といった単一の指標に代表され、いはば同一の社会的性格をもったアトム的存在に単純化されねばならない。これに対しある小集団内の個人の行動が問題とされる場合、国際的情勢とか国の経済とか言ったものは省略されよう。すなわち、省略による単純化というより根本的な研究方法においては同じ手法が用いられているのであり、さらに対象の違いによってマクロな要因が省略されるが、ミクロな要因が省略されるかの違いという点でも類似している。

従って、自然科学と社会科学の相違は省略の手法の相違ではなく省略がどの程度の量的精密さをもってなされ、それによる単純化から見出される法則性がどの程度の量的厳密さを備えているかという点で自然科学に著しく後れをとっているということなのである。

たとえば社会科学で言う「家族縮少の法則」とか「グレシャムの法則」とかは（もちろんこれ等はそれぞれの学問における共通財産的重要性をもったものではなく、むしろ通俗的、ことわざ的に使われる程度のものであるが）その表現が定性的かつあいまいであるが故に何となく通俗的に理解し得るが、本来の法則性とは悪貨、良貨を定量的に定義し、その変化の過程を法則的に定式化するところにあるのであって、そのための精密化を志向せず（それが非常に困難な作業であることは予想されるが）、自然科学との方法的相違に帰してしまうのは誤りであろう。とくに確率論的可能性をぬきにした定性的表現が、しばしば「風がふけば桶屋がもうかる」という荒唐無稽な推論結果を生むことを考えれば、量的厳密性の追求は社会科学といえども不可欠の要件なのである。古典的社会科学の命題が、予測ではなく予言であるといわれるのも、以上の事と無縁ではなく、効果についての予測可能性と、診断における厳密性を必須の要件とする社会福祉実践の理論形成（practical theory）における、古典的方法の不毛性と、自然科学的方法ならびに視点（量的厳密性）の必要性はもはや言を俟たないところである。

4. 純粋（理論）科学と応用（実践）科学

—価値判断排除論争と関連させて—

前節の(3)において少しふれたように、ポアンカレの科学のための科学とは、純粋科学の意味であり、むしろ応用科学的技術（それは思惟と労働の経済という効率性を軸として成立する）の進歩のための前提として現実からの切断を求めるものであった。ウェーバーの〝価値判断排除〟も一見これと似た構造を持つが、実践における社会的技術の重要性が視野に入っていないため、社会政策—理想の叙述—と、社会科学—事実の思惟的整序—の区別に力点がおかれすぎ、実践的科学技術論という中間項が欠落したと考えられる。すなわち彼が「認識と価値判断とを区別する能力[17]」を問題にし、「ある事実の真理を直視すべき科学的義務と己の理想のためにつくすべき実践的義務の遂行の違い」を力説し、社会政策的討究を科学と思ってはならないとして社会科学と区別したのは[18]、価値理念ないしはイデオロギーと科学との区別であり、そこでの価値ないしイデオロギーは人間を実践へと駆り立てる意欲とかかわるものであって、価値実現をより効率的に行うための科学的手段を生み出す道具的（instrumental）科学については何らのべられていない。従って彼の言う科学的不偏性には手段の中立性は視野に入っておらず、「思惟する人間が語ることをやめて、意欲する人間が発言し始めている所を、またその議論が悟性に向っている箇所と感情に訴えている箇所を明確に区別すべきである」ことをあげ、「事実の科学的論究と評価的論断との混同の有害性」を訴えているに止まっている[19]。

さらに又、彼が唯物史観（歴史的発展法則）との対決を宣言する時も[20]、経済学はある特定の経済的な世界観から価値判断（ならびにその実践）を生み出すべきであるという見解への激しい反撥が[21]下敷きになっているのであるが、そこでも、経済学（科学）と価値判断（実践への動機づけないしは目標）の峻別にのみ目が注がれて実践手段の科学の存在が忘れられている。

もっとも、ウェーバーにおいても、科学の手段性に言及しているやに見られる所がある。すなわち彼が「経験科学は何人にも何をなすべきかを教えることは出来ず、ただ彼が何をなし得るかを教えることが出来るに過ぎない」という

時、価値あるいはイデオロギー的当為（Sollen）との区別と共に、選択し得るあれこれの手段（技術）を科学が提供し得ることに言及しているのである。しかしその時の経験科学とは彼がまさに文化社会科学の特質でないとして区別しようとした自然科学的法則性にかかわることであって、Aという手段をとればBという結果をもたらし、A′をとればB′を生むという因果法則をぬきにして科学的手段は考えられないのである。

もちろん、ウェーバーも社会的諸法則の存在を全く否定していたのではない。「或る文化現象の因果的説明が問題となる時、因果法則の知識は目的でなく単に手段を過ぎない」といい、「社会的諸法則の認識は社会的実在の認識では決してなく、むしろこの目的のために我々の思惟が用いる種々の補助手段の1つに過ぎない」[22]という時、社会的法則の存在が前提されているからである。ただ彼の場合それが単なる手段という表現に終り、科学における手段の正当な位置づけがなされていない。

自然現象においても、或る特殊一回的な現象—たとえば巨大地震—の認識において、地球物理学の理論や法則は、それを解明するための手段であって、法則定立とは別のものである。そして、力学や物性論の知識は、地球物理学の理論や法則のための手段となるという学問的構造を持っているのであって、より基本的な理論や法則は、より現実的な法則の定立や現象の解明への手段となるのは当然の事であろう。そして最も現実的なものとは実践であり、ウェーバーの言う社会的事実の認識も実践のための前提的手段となる。

従って、彼における実践とは、基礎科学から応用科学、実践科学に至る学問的構造での実践ではなく「拘束的な規範や価値を発見し、それから実践に対する処方箋を導き出すというようなことは断じて経験科学の課題ではない」という文脈から分るように、価値やイデオロギーといった実践の目標ないしはモーティベーションにかかっるものであって、効率性を軸とする手段にかかわるものではないし、ましてや法則的予測可能性とは無縁のものである。結局のところウェーバーは、価値実践の意志の問題と科学とを峻別しようとして、実践手段の科学をも彼岸へ押し流してしまったのであり、ポアンカレの言う科学のための科学が実践手段の科学を予想していたのとは大きな相違がある。

なお、実践理念への傾倒から、実践手段の重視へ、重心を移しかえざるを得なくなった例として、マルクス主義を国家成立の理論的支柱とする国々において、実現すべき価値への献身のみでは価値実現が容易に達せられないことから、手段に対する反省が生まれていることがあげられる。ソ連における社会学の復権はまさにそのあらわれであり、特にその当初社会学が実質的には社会調査をさしていたのは、手段の前提—さきの言葉を使えば社会診断の前提—として調査の持つ意味を物語るものである。「近代化」をスローガンとする最近の中国の変化も又、同じ文脈のものと見ていいだろう。

5. おわりに

自然科学との方法論的差異にもとずく独自の方法論を基盤として組立てられた古典的社会科学が、今まで論じて来たように実はそれ程自然科学的方法と差異のあるものでなく、むしろ類似点が多いとすれば、社会科学の概念体系なり理論なりは大きく書きかえられる必要がある。その1つに、既に古典的二分法（dichotomic）的類型から2次元、3次元の類型へと量的進歩が見られるし、等級付け（grading）による尺度化をもとにした類型設定も試みられている。

しかし、実践手段の科学としての社会福祉においては、さらに一歩を進めて、社会工学的方法論に立った独自の概念体系を構築することが必要であろう。その際、現存する古典社会科学のカテゴリー体系の多くは作り変えられる必要があり、実践科学の立場からは、available 性と manageable 性とが、概念構成の当否の基準とならねばならないし、特に現実認識と直接的にかかわる社会福祉調査においては、理論社会科学の概念や理論の検証という随伴的な立場ではなく、認識のための独自の分析概念を必要とする。たとえば老年社会学における age—cohort—period 分析におけるそれぞれの概念は、調査統計の必要から生まれたものであって、この様な概念構成を引き出す論究が社会福祉調査論の課題であるが、今回はその事の指摘に止まった。次の機会にそれを論じたい。

なお古典社会科学における価値判断論争も、いわゆる純粋ないしは理論科学

として、一旦、価値および現実とのかかわりから切断することを求めたものであり、科学の客観性から見て当然の事である。ただ、古典社会科学では、いわゆる社会哲学的色彩が強く、価値の混入しやすいものであったため科学の名のもとにおいては峻別されるべきであるという自明の事が強調されたに過ぎない。

しかし、実践科学においては価値の問題を素通りして研究が進められるかどうかは疑問であるが、差当っては、実践手段の科学として、手段の中立的用具性を指摘するに止める。ただ、かっての価値判断論争が、応用・実践科学を視野の外に置き、異った次元でなされたものであることはさきにのべた通りであり、応用・実践という事自体が、何かの目的（値価）にかかわる以上、むしろ価値を正面にすえた論究が必要であろう。手段は価値実現の効率性にかかわるものだからである。

注および参考文献

(1) 見田宗介、「価値意識の理論」1966年、弘文堂、17頁。
(2) R.リントン、清水幾太郎他訳「文化人類学入門」1952年、創元新社、49～50頁。
(3)、(4) 福武直「社会調査」1958年、岩波書店、2～4頁。
(5) 石本新他編「科学時代の哲学1、論理・科学・哲学」培風館、1964年における石本の用語による。203～219頁。
(6) H.リッケルト、佐竹哲雄訳「文化科学と自然科学」1939年、岩波書店、98頁。
(7) 同上、71頁。
(8) 同上、99頁および142頁。
(9) H.ポアンカレ、吉田洋一訳「科学と方法」1927年、岩波文庫、17頁。
(10) M.ウェーバー、富永祐治他訳「社会科学方法論」1936年、岩波文庫、54～55頁。
(11) ポアンカレ、前掲書、7頁。
(12) M.ウェーバー、前掲書、59頁および63頁。
(13)、(14) ポアンカレ、前掲書、12～14頁。
(15) 石本新他編　前掲書、210頁
(16) ポアンカレ、前掲書、7頁
(17) M.ウェーバー、前掲書、23頁。
(18)(19) 同上、26頁。
(20) 同上、36頁。
(21) 同上、13頁。
(22) 同上、55～56頁および58頁。

Fundamental Conditions of Social Work Research—method and methodology on studying social sciences—

by *NOMURA, tetsuya*

In social sciences, there were two main streams of methodology in cognition of social fact. One is historicism and the other is naturalism (after K. Popper's notion). And in the long course of studying social sciences, they regarded as if they are imcompatible and opposing. But, if we study carefully, we shall find both methodology have more similarity rather than discrepancy.

(You can see it in comparing Max Weber's "understanding method" with Henri Poincare's "method of science.")

The difference between the both is not essential but quantitative exactness just as the notion of "negligible zero". So, one thing to be aimed is to realize the complementality of the both method about recognition and understand of social fact.

But it is natural that it wll be more desirable and fruitful to move naturalism (as shown in the rise of social engineering), especially in the field of practical and applied science such as social work.

In this context, we have to construct another paradigm as age—cohort—period characterized visibility, manageability and so on, intead of speculative notion.